

学人露伴(四) — 仏教・その三 —

関 谷 博

9

この頃少し華嚴経を調べて居りますが、その中に婦人に關する面白い話を三つばかり見受けました。

これは『伊舍那の園』(婦人画報)大4・5)冒頭の一節で、この「面白い話」三つのうちの一つを紹介するのが本作である。華嚴経からの、残る二つの話に基づく作品は、『春の夜語り』(「淑女画報」大5・5、6)と『道を尋ねて』(「婦人」大6・3)。一年ごとに、いずれも婦人向け雑誌に発表されている。三つの「面白い話」は、どれも華嚴経「入法界品」から採られたもので、つまり善財童子の善知識歴訪の旅で出会った、ないしは聞いた(?)人物に関する物語である(この三作を、本稿において便宜的に——いざさか大仰な言い方になるけれども——露伴「華嚴経三部作」と呼ぶことにする)。

華嚴経の漢訳は、仏陀跋陀羅訳の六十卷(通称「六十華嚴」四二一年)、実叉難陀訳の八十卷(通称「八十華嚴」六九九年)、般若三蔵訳の四十卷(但し「入法界品」のみを訳したもの。通称

「四十華嚴」七九八年)があるが、主人公の婦人たちの漢訳名にはそれぞれ異同があるので、左にまとめしておく。

『伊舍那の園』の主人公・「伊舍那」

「休捨」(「六十華嚴」卷四十七第三十四之四)

「休捨」(「八十華嚴」卷六十四入法界品第三十九之五)

「伊舍那」(「四十華嚴」卷第七)

『春の夜語り』の主人公・「具足艶吉祥」

「離垢妙徳」(「六十華嚴」卷五十六第三十四之十三)

「具足妙徳」(「八十華嚴」卷七十五入法界品第三十九之十

六)

「具足艶吉祥」(「四十華嚴」卷第二十八)

『道を尋ねて』の主人公・「弁具足」

「自在」(「六十華嚴」卷四十八第三十四之五)

「具足」(「八十華嚴」卷六十五入法界品第三十九之六)

「弁具足」(「四十華嚴」卷第十)

露伴「華嚴経三部作」が「四十華嚴」を用いていることは明らかである。

本稿のこれまでの考察から、露伴文学における仏教は、その出発時においては共同体社会から解放された「個」の超出性を文学的に形象化・絶対化する手段として利用され、次いで、若い人々に向けての教訓譚の宝庫と位置付けられたらしいことを確認した。特に「少年文学」の素材として露伴は仏教説話を多く用い、日清戦争前後（明治二十年代後半）、国家間の対等で自由な国際秩序を構想する際に、仏教語彙・仏教説話は集中的に利用されたのであった。

では、大正期の婦人向け雑誌に、華厳経からの三つの説話に基づく物語が掲載されたというのは、いったいどのような事情に因っているのだろうか。

※

かつて露伴が少年文学雑誌に集中的に関わったのは、おそらく彼の〈国民〉想像の試みとしてであった。それと比肩されるような、何らかの重要な意義があるのか、どうかは、まだはつきりしたことは言えないが、明治三十六年からおよそ大正六年までにかけて、露伴はかなり積極的に婦人向け雑誌に文章を寄せた。その前後にも、いくらか婦人雑誌との付き合いは見受けられるけれども、散発的で、ひとまとまりの仕事と見做す必要はさして無いように思われる。その概要を次にまとめよう（「逸文」とあるのは、

林真氏が発掘し、『日本古書通信』に「幸田露伴の逸文」として断続的に紹介された露伴逸文である）。

露伴・婦人雑誌掲載作品 年次別一覽

明治三十五年（一九〇二）

「家庭の一致」（『婦人界』 8月）逸文42

明治三十六年（一九〇三）

「支那第一戯曲の梗概」（『女学世界』 1〜3月）全集24

「評釈 新年の俳句」（『女鑑』 1月）逸文58

「我邦書籍の古今」（『女鑑』 2月）逸文56

「文学上の遊戯」（『女鑑』 2月）逸文56

「浮世一言芳談」（『女鑑』 3〜9月）全集29（但し岩波全集では、「人の言」と題して、これに「婦人雑誌」等に載った大正3年までの数話を加える）

「縁不縁（『小品十種』の①―以下、同じ）」（『女鑑』 6月）全集3

明治三十七年（一九〇四）

「利休箸（②）」（『女鑑』 6月）全集3

「つなぎ墨（③）」（『女鑑』 7月）全集3

「雑記帳」(④)、「女鑑」9月 全集3

「油障子」(⑤)、「女鑑」11月 全集3

明治三十八年(一九〇五)

「初よこび」(⑦)、「女鑑」1月 全集3

「夫の職業に対する尊敬、献身的精神」(「ムラサキ」12月) 全集別・上

明治三十九年(一九〇六)

「新年の遊戯」(「ムラサキ」1月) 全集別・上

「美はしき日本婦人の特色」(「婦人世界」1月) 全集別・上

「齊家の両極」(「ムラサキ」6月) 全集別・上

「女子に小説は禁物か?」(「女子成功」7月) 逸文21

明治四十年(一九〇七)

「花鳥」(「女子文壇」4月) 全集29

「塩加減」(⑧)、「女鑑」7月 全集3

「水の味」(⑨)、「女鑑」8月 全集3

「余は如何にして一日を送る乎」(「家庭之友」10月) 全集40

「ひとり言」(「女学世界」11、12月) 全集29(但し岩波全集では、これに大正3年頃までに書かれたと思われる九篇を加える)

明治四十一年(一九〇八)

「余の最も好める娯楽」(「新婦人」1月) 全集39

※この年6月、『小品十種』刊行。

明治四十三年(一九一〇)

「京都の女東京の女」(「婦人画報」5月) 全集別・上

「亡妻の思出」(「婦人くらぶ」6月) 逸文48(但し前半のみ。全文は吉成大輔『露伴全集』未収資料「亡妻の思出」注釈)

「緑岡詞林」平20・3に翻刻されている)

※この年4月8日、妻・幾美子歿。

明治四十四年(一九一三)

「敵味方に絶路を示す(細川忠興の妻)」(「婦人世界」2月) 全集40

「予にして若し婦人たらば如何なる職業の良人を選択すべきか」(「新婦人」4月) 全集40

「家族と娘との間」(「女子文壇」4月) 逸文57

「向上落下の原因として見たる婦人の観察力」(「婦女界」5月) 全集別・上

「現代の恋は盲目にあらず」(「婦人くらぶ」5月) 逸文52

「美人のいろく」(「婦人画報」7月) 全集別・上

「女と水と」(沢田撫松著『日本女史』序文。7月) 全集32

明治四十五年・大正二年（一九一三）

「宜しく趣味の向上をはかれ」（『婦女界』1月）全集別・上
 「一個人として世間に立てよ」（『女子文壇』1月？）全集別・下

「三馬の浮世風呂」（『女子文壇』2月）全集29

「服装と美醜との関係」（『婦人画報』2月）逸文47

「現代婦人の言葉」（『婦人画報』5月）全集別・上

「三味線は弾く姿勢がよい」（『女子文壇』6月）逸文52

「川柳と紋」（『女学世界』10月）全集30

※この年、5月21日、長女・歌子歿。10月、児玉八代子と再婚。

大正二年（一九一三）

「歳旦の辞」（『新婦人』1月）全集32

「利休の妻」「忽必烈の妻」（『新婦人』1月）全集6

「空の女と実の女」（『大正婦人』1月）全集別・上

「柳」（『新婦人』2月）全集32

「活羅が妻」（『新婦人』2月）全集6

「江戸の遊女」（『新婦人』2月）全集25

「処女の誇り」（『婦人画報』4月）全集別・上

大正三年（一九一四）

「人を観察する法」（『淑女画報』5月）逸文54

「学者の細君」（『婦人画報』6月）全集別・上

大正四年（一九一五）

「容貌に表れた心の美しさ」（『婦人画報』1月）全集別・上

「人相を観る法」（『婦人画報』1月）全集別・上

「女学校より雑巾掛け」（『女の世界』5月）全集別・上

「伊舎那の園」（『婦人画報』5月）全集6

「美人と詩人（『幽情記』の⑬—以下、同じ。）」（『淑女画報』8月）全集6（但し「幽夢」と改題）

「簡易な避暑」（『婦人画報』8月）逸文5

「風景の見方は時代で違ふ」（『婦人世界』9月）全集別・上

「早く涸れ行く婦人の生活」（『婦人画報』10月）逸文36

「趣味と婦人」（『家庭新誌』10月）逸文17

「驚濤艶魂（⑩）」（『淑女画報』11月）全集6

大正五年（一九一六）

「謎『白根山麓の情話』について」（『女の世界』1月）全集30

「言葉づかい」（『をとめ』1月）全集30

「はづかしがり」（『をとめ』2月）全集30

「女のはなし」（『女の世界』3月）全集別・上

「女に望むべき事望むべからざる事」（『女の世界』4月）全

集別・上

「新家庭の前途に横はる難関」〔淑女画報〕4月 全集別・上

「陽気の極」〔婦人週報〕4月 逸文13

「晩婚よりも寧ろ女は早婚せよ」幸田露伴博士の狂歌」〔女の世界〕5月 全集別・上

「舅姑別居の可否得失」〔婦人之友〕5月 全集40

「春の夜語り」〔淑女画報〕5、6月 全集6

「紅葉艶語」〔淑女画報〕7月 全集6 (但し「碧梧紅葉」と改題)

「桃花扇の三美人」〔12〕〔女の世界〕7月 全集6 (但し「桃花扇」と改題)

「共命鳥」〔5〕〔淑女画報〕9、10月 全集6

「結婚の儀式に保存したき点」〔婦人雑誌〕11月 逸文13

「人情の上より」〔婦人雑誌〕12月 逸文34

「正月の飾り」〔婦人週報〕12月 逸文11

大正六年(一九一七)

「蛇と女」〔女の世界〕1月 全集30

「群玉峰」〔1〕〔淑女画報〕1月 全集6 (但し「真真」と改題)

「婦人と新古」〔婦人雑誌〕1月 逸文45

「愛と教育」〔婦人新聞〕2月23日 逸文15

「道を尋ねて」〔婦人〕3月 全集6

「水滸李獅々」〔2〕〔淑女画報〕5、6月 全集6 (但し「獅々」と改題)

「進一步退一步」〔婦人雑誌〕7月 逸文14

「女子の禍福の分岐点」〔婦人雑誌〕8月 逸文20

「繪画を通して見た美人の眼」〔婦人雑誌〕9月 逸文26

「人と食物との関係」〔婦人雑誌〕11月 逸文26

大正八年(一九一九)

「婦人の旅行鞆に入れるもの」〔婦人世界〕8月 逸文37 (但し、その前半は「婦人の旅行鞆に入れるものは」〔新聞九州日報〕大11・6/29/7/2)として全集別・下に所収)

※この年3月、『幽情記』刊行。

大正九年(一九二〇)

「日本文話」〔婦人世界〕1/3月 全集25

「伝説の実相」〔婦人画報〕4月 全集別・下

大正一〇年(一九二一)

「雑誌といふもの」〔女性日本人〕10月 全集40

大正十一年(一九二二)

「或る写本家と暮客と」(『女性日本人』8月) 逸文35

大正一四年(一九二五)

「貧乏の説」(『婦人世界』1月) 全集25

「まはりあはせ」(『婦人世界』6月) 逸文38

「運命は切り開くもの」(『婦人世界』9月) 全集30

大正十五年(一九二六)

「暴風裏の花」(『女性』10、11月) 全集6(但し単行本『龍
姿蛇姿』「昭2・8」に収録の際、「暴風裏花」と改題)

※この年、11月6日、長男・成豊歿。

昭和十五年(一九四〇)

「はねつるべ」(『婦人公論』8月) 全集30

10

これを眺めてみると、露伴が書いた婦人向け作品は、おおむね二つのグループ(AとB)に分けることが出来るように思われる。一つめ(A)は、時期的には明治三十五年から四十一年まで、とりわけ雑誌「女鑑」との繋がりがから生まれたと思しい、『小品十種』に結実する作品たちのグループである。

この時期、露伴は妻・幾美子と充実した家庭生活をおくっていた。その充実ぶりに関しては、筆者はかつて、露伴と釣りとのかわりを考察する中で、おおよその素描をしたことがあるので、詳しくはそれ―拙稿「釣人 露伴―(安楽)をめぐる政治／文学」(『文学 隔月刊』平17・1、2)―を参照されたい。このグループの作品は、そうした家庭生活の充実を背景に持つ自信、とでもいうべきものに裏打ちされた態度で、主に若い女性に向けて、露伴の発した人生指南、教訓的論説といつてよい。

若い人々が良き伴侶を得るにはどうしたらいいのか。良質の趣味ある家庭生活とはどのようなものか。家庭生活を安定させる工夫とはどのようなものか、等々が、『小品十種』の各篇では説かれている。論説文としては、「浮世一言放談」と「齊家の両極」が、『小品十種』との関わりが深いようだ。

「浮世一言放談」は、様々な人生遍歴をもつ老若男女の教訓的あるいは反面教師的な逸話が記されている。それらは『小品十種』の大半を占める、いかに良き夫・妻を選ぶか、あるいは趣味良き家庭とはどんなものか等をめぐる物語たちの、いわば発酵母体となつてるように、読める。「齊家の両極」(明39・6)と『小品十種』からは、より明確な関係性が窺われる。家庭を「平和の場所」「寛ぎの場所」「愉快の場所」にするための秘訣は、「寛大」と「緻密」であると「齊家の両極」はいう。主人夫婦が「家を齊へる」には、人に対しては「寛大」であるべきこと、心の使い方においては「緻

「密」であること、この両極端の目安を立てればよい、と「齊家の両極」は主張する。^②それが、『小品十種』中、「塩加減」(明40・7)と「水の味」(同・8)の連作で、それぞれ小説としての肉付けがされるのである。久しぶりに娘の嫁いだ家を訪れた老母が、出された「椀物の汁」の塩辛さと、しかもその塩辛さのうちに妙な甘たるさもあるのに気付く。娘も気づいて下女を厳しく問いたただすのだが、母はそれを制し、その下女が田舎から出て来たばかりの新米で東京風の塩加減に疎いこと、また田舎では汁物にしばしば甘みを加える習慣のあることを娘に教える、というのが「塩加減」。「齊家の両極」における「寛大」の実践例である。「水の味」は、同じ娘が久々に実家に帰り、今度は食事を給される側になる。母は娘に、そこらの魚屋で買ったものではない、鬼怒川で採れたばかりの貰い物の鮎を食わせるが、それを娘は特に口に出して褒めなかった。これを粗忽として、やはり老母が戒める話。こちらは「緻密」たるべきことの実践例である。

このグループ(A)の作品は、それなりに人情を穿つ知恵・教訓を含むかもしれないが、要するにそれ以上でも以下でもない、といった類のものたち、といつてよいと思う。

もう一つ(B)は、明治四十四年から大正六年までの時期に書かれた論説文と小説群である。この時期の論説文は、より抽象度の高い、観念的なかたちで「正しき婦人の生き方は如何なるもの

か」を論ずる。また小説としては「華嚴經三部作」の他、『幽情記』としてまとめられる諸篇が、婦人向け雑誌に掲載されている。『幽情記』は、漢詩文的世界を自由に飛翔する、精神の躍動を記した秀作である。教訓臭芬々たる『小品十種』と同日の談とすべき作品ではない。

明治三十五年から四十一年までのひとまとまり(A)と、明治四十四年から大正六年までのひとまとまり(B)の間にある、こうした作風・文学的レベルの違いは、前者の執筆舞台の主たるものが雑誌「女鑑」であったことに、かなりの程度由来しているようだ。「女鑑」以外の雑誌は、明治四十四年以降もしばしば露伴が作品を寄せ続けた、日露戦争前後に創刊された雑誌である(「女学世界」は明治三十四年創刊、「女子文壇」は明治三十八年創刊。また露伴の「家庭の一致」は「婦人界」明治三十五年創刊第2号を、また「美はしき日本婦人の特色」は「婦人世界」明治三十九年創刊号を飾っている)。これに対し、「女鑑」の創刊は明治二十四年八月で、明らかに他誌と異質である。「貞操節義なる日本女子の特性を啓蒙し、以て世の良妻賢母たるものを養成する」ことを主旨とした^③、という「女鑑」は、結婚―家事―育児といった一連のプロセスの中で婦人が出合いそうな諸問題に対して、有効な知恵・教訓を供給すること。これが、書き手に求められていた内容にすぎない。露伴は、いわばこの要請におとなしく従っていた様子である。彼自身が、幸福な夫婦関係と子育て暮らし(明治三十四年

長女出生、明治三十七年次女出生、明治四十年長男出生)のただ中であつて、こうした求めに応ずる心構えも、準備も、万端であつただろうことが想像されるのである。

しかし、日露戦争前後に発刊された婦人雑誌は、家庭の中だけではなく、社会の中で婦人が自立しうる、より広範な教養を提供することを標榜していた。その中には高度な文学的教養も含まれていた。たとえば『幽情記』にまとめられる諸作品の多くを掲載した雑誌「淑女画報」の編集兼発行人は松原岩五郎(二十三階堂。松原は、露伴の推薦で国会新聞社に入社するなど明治二十年代以来の露伴の知己)だが、彼は「淑女画報」以前に、「女学世界」の編集にも携わつており、そこで「帝国文学」派の執筆陣の多くを婦人雑誌に巻き込んで、古典文学の講釈などを書かせていた。こうした雑誌編集方針に反映されたところの、時代的要請——社会的に広い視野と高い水準の文化的教養を提供すること——を受け止め、それまでとは異なる姿勢で、婦人向け雑誌に書かれたのが、(B)グループの作品群である。

露伴の周辺にそれを促す変化も、あつた。愛妻・幾美子の死である(明治四十三年)。(A)グループの記述を支えていたのは幾美子の存在であつたから、その喪失は当然、作風の変化をもたらさないではいられなかつた。そして、二年余りのやもめ暮らしの中で長女を死なせた経験、またそれを契機として再婚に踏み切つた結果、露伴は新しい課題——学校教育と女性の問題——と出会うこ

とになるのである。

(B)グループの作品群を具体的にみると、まず、一方の極に、婦人の権利・自由と主体としての在り方をめぐる問題系がある。「向上落下の原因として見たる夫人の観察力」(明44・5)、「宜しく趣味の向上をはかれ」(明45・1)で主に展開される主題である(類似作品として「早く涸れ行く婦人の生活」[大4・10]、「趣味と婦人」[大4・10]がある)。

また、もう一方の極には、二人目の妻・児玉八代子との生活がもたらした問題系がある。「女学校より雑巾掛け」(大4・5)と諸個人の生活技術者としての能力低下に関する問題、またそれと学校教育との関連の問題である。

そして、この二つの問題系が重なり合つたところに、「空の女と実の女」(大2・1)、「処女の誇り」(大2・4)と主体的自立と生活技術の関わりの問題が位置するように思われる。類似作品としては「女子の禍福の分岐点」(大6・8)、また婦人雑誌から離れるが、「囚はるゝを欲せざるや」(「実業之世界」大3・11)なども同系列の問題意識から生まれた言説である。ここでは「自分を欺く」といった類の流行の言い回しへの痛烈な批判を通して、物事の実際に疎い、思いあがつた自我の在り方が問題化されている。二、三、例を挙げれば、

学校の教師の教を受けたり、新聞や雑誌で見覚えたりした事

をのみ土台にして、実際の工夫の上にそれを応用して実験体得するのでなければ殆ど空に落ちてしまふのである。

（「空の女と実の女」）

此頃の流行語に「自ら欺く」といふのがある。自分がかう思ふ人があゝせよといふから、其通りにするといふことを、自ら欺くといつてゐる。けれどもそれは自ら克つのであるといふこともできる。又、自分の思ふまゝに振舞ふことを、自ら偽らずと云つてゐる。けれども之は放縦であつて我儘とも取られる。自ら欺く、自ら欺かぬなどいふ語は、甚だ不明瞭なもので、色々に解釈が出来る。そんな一語多義の流行語を、勝手の時だけ持出して、妾は自ら欺くのは厭だなんぞと云つて、放肆にするのは甚だ宜しくない。

（「処女の誇り」）

そして人は皆自己に阿り、自己を賞賛する旗印として進歩せり／＼と叫んでゐる。前代の思想感情は総て価値無きものとして、自己等の時代及び自己等のみを最も優等なものと考え、其の結果莫大なる物質と、恐る可き智力と筋力とを費やして、恐ろしき殺傷事件（第一次世界大戦を指す―引用者）を進行さしてゐるのである。……欧羅人が努力して地獄の建設を企て、ゐるのを見るばかりである。……真の權威ある道理ある慈悲ある大いなる理想に囚はれて、そして事に当り務めを執つて行くのが真の幸福に到達する道ではあるまいか。

（「囚はるゝを欲せざるや」）

しかし、再婚がもたらしたにちがいない、生活技術の能力低下の問題系の極、および「自分」崇拜に対する文明論的批判については、すでに拙稿『望樹記』論―大正期露伴の批評活動』（立教大学『日本文学』平4・12¹）で触れたことがあり、また、婦人雑誌と仏教の関係を論ずる本稿とは、いささか関連が薄いので、ここではしばらく措くこととする。仏教となにがしか関わつてくると思われるのは、婦人の権利・自由をめぐる問題系の極においてである。この問題系に関わると思われる、論文二編を見よう。

「向上落下の原因として見たる婦人の観察力」

ここでいう「観察力」とは、「感応力」とでも言った方が分かりやすいかもしれない。婦人は「観察力が鋭敏緻密である為に、其の観察の対象に影響されることも非常に多い」。しかし観察対象は「善悪混淆した」ものなのだから、ただ「観察」するだけでは、対象物の俗悪に感応してしまう恐れがある。そこで「観察の傾向を善からしめんことを希望しなければならぬ」、つまり「学ぶ可きことを多く観察し得る傾向」を育て、「学ぶ可らざることを観察する傾向」を矯正する必要がある。さてその上で、ある女性の「観察の対象としての境遇」が、不幸にして「学ぶ可らざることのみ多き社会に身を置く」場合は、どうすれば良いか。

其の社会よりは幾らか遠い社会、即ち書籍等に依つて、其の学ぶべき所のみを見出すことに勉めるならば、知らず識らずの間に其の宜しき影響を受けるに相違ない。さういふ点からいふと、宗教、教育などゝいふものは、非常によき結果を与えるものである。今日の宗教は、既に其の権威を失して居るのであるが、兎に角宗教が良いといふ訳は一つは其の学ぶ可きものゝみを提供せんとする努力が、立派なる人々に依つて致されて居るからである。

ここで宗教は、与えられた境遇からの影響力を減殺する遮蔽装置、悪しき生活環境の汚濁から自己の精神を保護する役割を期待されている。

「宜しく趣味の向上をはかれ」

今日「趣味の広い婦人は男子と同じであるべき筈であるが」実際はそうなっていない。「自己の狭い範囲即ち父母、兄弟、親戚、朋友等」の範囲内（この「範囲」はまた、「サークル」と言い換えられている）で趣味性が決定されてしまっていることが多いようだ。しかも「総じて婦人は、其時代の風潮に支配される事が多い」。したがって婦人は、「時代の奴隷」にならぬよう、「常に時代の正当なる批判者として立つやうに心懸けねばならぬ」と露伴

は言う。どうすれば良いのか。「其サークルの外に立つてこそ批判が出来るのであつて、其中に居つては出来るものでない」。

例へば、クリスト教に接せぬ婦人の趣味と、一度在来の輪を脱してクリスト教に接した婦人の趣味との差を比較すると、後者の趣味は、夫れだけ拡張され享受されて居る。之れは云ふまでもなく、其輪を大きくした結果である。それ故、時代の風潮に溺れず益々進んで行かうとするには、勢い之れを外国の事情、或は歴史上の文学宗教美術等、総て今日の時代と離れたるもの、扱は地方の種々なる感情や思想等を知つて、そして自己の感情思想を養ふやうに努めねばならぬのである。

ここでも宗教は、（文学美術等と並んで、だが）自分の生まれ落ちた境遇、自然に置かれた境遇、「サークル」からの影響力を遮る機能を期待されている。そして、自分を制約する（時間的かつ空間的な）「サークル」そのものを、「外」から批判しうるような「趣味」を培う上で、宗教は必ずやその糧となるだろうことを信じている。

露伴が「華嚴經三部作」を婦人雑誌に載せた動機は、恐らくこれである。露伴は、婦人たちを日本の当時の風潮、あるいはもつと根底的に、日本の風土・伝統から一旦隔離し、その「サークル」

から解放することを企図し、そのための具体策として仏教由来の物語に手を染めたのではないかと考えられる。

11

冒頭で触れたように、露伴「華嚴經三部作」はいずれも華嚴經の終品「入法界品」から採られたものだが、善財童子の求道の旅を記す「入法界品」で、彼が出会う善知識五十三人のうち、『伊舎那の園』の伊舎那は、(最初に出会った文殊菩薩から数えて)八番目に歴訪した善知識である。『道を尋ねて』の弁具足は、十四番目に赴いた善知識。善財童子はこの二人から直接教えを乞うている。これは「入法界品」前半の形式である。一方、『春の夜語り』で訪ねた善知識は、瞿波積種女すなわち釈迦族の女・瞿波(ゴーパー)という、文殊菩薩から数えて四十一人目にあたる女神で、「入法界品」の後半で登場する善知識である。先に『春の夜語り』のヒロインを具足艶吉祥童女と書いたが、それは、この女神・瞿波が、彼女の本生譚の中で、「大過去劫」の時、その姿をしていた、ということを指している。だから、具足艶吉祥童女自身が善財童子に教えを授ける、というわけではない(『春の夜語り』末尾近くに、「此の談の背後には、釈迦及び其の妻たりし瞿波、及び瞿波の母善目夫人の存することを思ふべきである」とあるのは、瞿波と釈迦が、その「大過去劫」の時において、具

足艶吉祥童女と、彼女の恋焦がれた威徳王として、それぞれ具現していた、という意味である)。つまり、善知識みずから善財童子に直接教えを垂れるという(「入法界品」前半の主な)形式を採っていない。『春の夜語り』が、前後の二作品に比べ、いささか異質な構成をもった作品である所以である。では、この三作の内容に入ろう。

『伊舎那の園』

「入法界品」前半の語りは、善財童子が、訪れたN番目の善知識からの教えを受け、その後、その善知識から、教えを受けるべき次なる(Nプラス一)番目の善知識を示され、彼または彼女のいる場所へ行くこと、つまり「南へ行け」、と命じられる形式を採っている。ここでは、「海幢比丘」から教えを受けた後、「円満光」という城内の林に、「伊舎那優婆夷」がいるから、そこ、「南へ行け」と善財童子は命じられるのである。

物語の大部分は「入法界品」の当該部分をわかりやすく和訳したもので、まずはこの仏教経典の雰囲気を読者に伝えようとしていることが窺われる。梗概を記す必要はあるまい。教えのまとめを兼ねた、末尾部分で露伴はこう書いている。

伊舎那優婆夷の話は大体以上の通りであります、私はこの伊舎那の同類行門と云ふことが如何にも女らしい、床しい説

であると思ふのであります。即ち我は或る衆生、或る国と限られたもののために菩提心を起すのではなくて、一切の衆生、一切の時代、一切の大虚空の爲めに起すのである。それ故に又我を思ひ我に随従する者は、決して誰をも棄てない。と云ふ処は即ち普通の愛であります。けれども、それは同類でなければならぬ、我に縁のあるものでなければならぬ、善の心を起す者でなければならぬ、でなければ遂に永劫に我を見、我と共に鳥鳴き花歌ふ普莊嚴の楽園に住することは出来ない。と云ふ処にもこの同類行門と云ふことの、漠然として人の生活は永遠に美しく、又人は窮極善を欲することになると云ふ意味なのであります。

善の心の根柢を、特定の地域共同体の倫理・道徳に求めるのではなく、伊舎那の普遍的な愛から発するものとする。そして人は、この伊舎那と「同類行門」でなければならぬ、なる以外に善性を持つことは叶わない、ということかと思う。善の心の普遍性と「同類行門」という制限付きであることとの間の関連が、少しわかりにくい、理解の及ばないところがあるように、筆者は感ずる。ここは、続く『春の夜語り』の冒頭を瞥見しておくのが便法のよさうだ。曰く、

人といふものの存在する限り、生々の大法の行はれぬといふことは無く、生々の大法の行はるゝ限り、恋といふことの無くなることは有りますまい。

この後、恋は動物的にも心霊的にも解釈が可能、と続く。つまり、恋は「生々の大法」から発せられるものであるが、と同時に、それは動物の恋から心霊的恋までの、広い振れ幅がある、ということである。この振れ幅の何処かに、その振れ幅の内、心が動物的恋から心霊的恋の方へ揺れる時、伊舎那の「同類行門」は建立される、ということではないだろうか。

伊舎那の愛は普遍的だが、人の本性の中にそれが丸ごと装填されているわけではない。人々の愛は動物的なレベルに留まるかたちで発露することもある。ゆえに、愛が普遍的なかたちをとる程に十全なかたちで発現するためには、伊舎那の「同類行門」となつて従前の在り方から自己を脱皮させなければならぬ。人は一旦、生まれ落ちた「サークル」から離脱する必要があるのだ、ということになるのである。

『春の夜語り』

恋は「生々の大法」から発せられるのであるから、それが無くなるということは考えられない。が、恋は動物的にも心霊的にも解釈が可能である。そして、

余り心霊的に解釈する時は、解釈が空疎になり、余り動物的に解釈する時は、解釈が鄙野になつて、いづれも吾人を不正当の地位と不利益の境涯に立たすに至りはせぬかと思はれます。いづれかと云へば、解釈は両極端の中央、即ち右端でも無ければ左端でも無いのが、真を得るに近いと云ひ度いのですが、それよりは寧ろ両極端を包含し得る解釈が、真を得るに近いと云ひ度いのです。

以上が序章にあたる一節。これを踏まえて、三つの物語が紹介されるのが『春の夜語り』という作品である。

一つ目は、「雄略天皇の御時の赤猪子の恋物語」。『古事記』下つ巻を主とし、一部に『日本書紀』巻第十四が参照されている（「彼の御獵の時に当つて、猪を踢殺したまふたり御諫の歌によつて直に舍人を赦させられ、また「我は善言を獲たり」と悦ばせられた事など」の、雄略に関するエピソード部分）。美和川で洗濯をしていた赤猪子を見初めて「汝、嫁がずてあれ、やがて喚してむ」と声を掛けた雄略が、そのまま忘れてしまい、ずっと迎えを待っていた赤猪子は、ついに八十年後、宮中に出向いて、天皇との「贈答四首の歌」を遺す、という話。

語り手は、この赤猪子の物語を「吾邦の婦人はおのづから吾邦の婦人といふ一般の天然約束に従つて、外国の婦人とは異なつた

思想や感情や智能や体躯を有して居ます」で語り始め、次のように語り納めている。

赤猪子の恋の如きは、実に神聖な恋というて宜いと思はれる。しかも其の八十年を持續した内訳の恋慕の強い一念に対し、八十年を沈黙した外的の謙抑の態度は、如何にも古日本婦人的である。

絶賛に近い、とも読めそうである。が、「宜しく趣味の向上をはかれ」に従えば、赤猪子の恋は日本という「サークル」から自由でない、とも受け取られる。また『春の夜語り』序章の言に従えば、恋の解釈があまりに「心霊的」で「空疎」とも受け取られかねないことになろう（語り手は「内的の恋慕の強い一念」を肉付けするために、赤猪子を娶ろうとした人、縁づけようとした同情者、恋焦がれた男たち、拒絶されて怒つたり憎んだりした者、あらぬ噂を立てた者等もあつたらうが、いづれにも靡かず、屈せず、ただひたすら八十年を待ち暮らした赤猪子の内心を十分同情的に付度して、「空疎」を避けようとしているけれども）。あまりにも「古日本婦人的」で、あまりにも「心霊的」だ、という感を払拭することは、そう容易ではなさそうだ。

そこで次の話は、日本を離れ、「古印度の婦人の物語」となる。佛弟子・難陀とその妻・孫陀利のエピソードの紹介。原拠は仏本

行集経卷第五十六から。

難陀と孫陀利の夫婦は相思相愛のカップルであったが、一方で難陀は、仏道にも心を寄せていた。そこへ、仏陀瞿曇がやつてきて、彼はそのまま瞿曇に付き従つて屋敷を出てしまう。孫陀利は自分の香水を夫の額に塗つて「此の点じた化粧水が乾ききらぬ間にまた此室へ還つて来て下さい」と念を押したが、難陀はそれも忘れて、とうとう出家してしまつた。とはいへ、いざ出家してみると修行は辛く、愛妻への思いは募るばかり。遂に「直情径行の難陀は、堪へられなくなつて、嚴肅と清浄とをもつて其の生命としてゐる精舎の白壁へ、恋しい孫陀利の像を描いたといふ談」。

今日の人から論ずれば、孫陀利や難陀に無理は無いやうであります。それは人間世界を中心としての思想から然様なるので、仏陀やなぞの方の、人間界を然のみ尊いものとせぬ思想から云へば、孫陀利や難陀は迷へるものとしか云はれぬのであります。

難陀と孫陀利夫婦の愛は、「古印度」に留まらない（「今日の人」にも通用する）、「人間世界を中心としての思想」が認めるところの、ごく自然な姿である。その意味では「生ゝの大法」から外れず、執着には違ひないけれども、「普遍的の愛」に近い、とも言えさうである。だが、『春の夜語り』序章の言に従うと、こちらは「動

物的」に偏つて「鄙野」なるを免れぬ、ということになるだろう。こうして物語は、いよいよ華嚴経からの、具足艶吉祥童女の段に入る。

時の王・財主王の太子に、威徳王という「美貌徳相兼備はつた方」がいた。或る日威徳王が男女臣隷を従えて「香牙園」というところへ「遊観」に出た。たまたまその時、具足艶吉祥という非常に美しく智慧聡明な童女も母と共に出遊して、威徳王の一行に出会い、太子に一目惚れ、「愛染の心」を生じる。具足艶は母に胸中を打ち明け、母の力で「彼の方に事ふる身となることを得たい」と願う。けれども母は、われらのような卑賤の身で「国王の太子様を思つたとて何となるものであらう」と、「国柄家柄や世の態人の態に就いて説いて聞せ」た。

さて、その「香牙園」の隣には「法雲光明」という道場があり、そこで、勝日身如来が正覚を成し、七日を経たところだつた。具足艶は夢にその如来を見、覚めて後にまた虚空に勝日身如来が現れて、自分は法雲光明道場で正覚を得て七日を経たので諸菩薩天龍夜叉の他、一切の主及び男女眷属等が「見仏聴法」のために来集するだろう、お前も「親近礼敬すべし」と、という声を聞いた。そこで、

具足艶は母の説示も身分の相違も忘れ果て、恋の一念の誠と、平等無差別の仏の功德に加持せらるゝことによつて、其

の日頃の思、太子を景慕して已まざる由をば、畏るゝこと無く太子の前に於て申出したのである。前に挙げた赤猪子の談と此の具足艷の談とを対照したらば、如何に両者の間に相違のあることでありまじやう。

自分の思の切なることを訴える具足艷に対し、威徳王は女人が煩惱苦悶の種となることの如何に多いかを詩を以て答えた上で、具足艷とその母・善現の誠実を確かめる。もし自分が出家したらどうするか、という太子の問いに、具足艷は「妾も当に随順して精勤し、修習し親近して捨てず」云々。そこで威徳王は具足艷を容れる。と、そこに勝日身如来が登場して、太子を大悟させると共に、父の王も大いに喜んで位を太子に譲り、ここに転輪王が誕生する。転輪王となる時は七つの宝（兵宝、蔵宝、等）を具足するとの言伝え通り、具足艷吉祥童女こそは七宝の一、女宝であった、めでたし、めでたし……。

此の具足艷の物語は如何にも階級制度の強い、そして之に反する平等思想の燃えて居た印度の談話たることをあらはし、且又、世間の欲楽を崇拜することの強い、そして之に反する解脱思想の燃えて居た印度の談話たることを現はして居ると云つて差支無いと思はれます。赤猪子の談に比べて、国が異なれば恋の物語も異なると観じて、双方を相較べて見ると其

処に一種の面白味を感じずには居られない。

これが『春の夜語り』の結語である。

語り手の勧めに従つて、「赤猪子の談」と「具足艷の談」を対照してみよう。

両者に共通するのは、男女の置かれた各々の身分の隔絶である。異なるのは、身分の隔絶に従順に耐えてひたすら相手の迎えを待った女と、身分の隔絶を無視して躊躇うことなく男に向かつていった女の、態度の相違である。「階級制度の強い」ところは、両者に共通だが、「平等思想」を以て自己の「愛染の心」を貫こうとする意志は「具足艷の談」にあつて、「赤猪子の談」には、ない。

具足艷は自己の「欲楽を崇拜すること」が強く、それゆえに一気に男と共に出家をも厭わぬ決意を表明する強さを持つ。この決意表明は勝日身如来の加護があつてこそだから、如何にも「解脱思想の燃えて居た印度の談話」的である。一方、赤猪子の強さは、「八十年を持続した内的の恋慕の強い一念に対し、八十年を沈黙した外的の謙抑の態度」に表れている。が、その「外的の謙抑の態度」を支えたのは、「如何にも古日本婦人的」な慣習態度である。

先に、赤猪子の恋は、日本という「サークル」から自由でない、また恋の解釈においてあまりに「心靈的」で「空疎」となりかね

ない、と述べた。語り手は、何も具足艶の行動・心理を見習え、と訴えているわけではない。ただ、「赤猪子の談」と「具足艶の談」を「双方を相較べて見ると」面白からう、といっているだけである。比較してみれば、おのずと日本という「サークル」の中の常識が相対化され、そこから自由になる度合いが増すだろう。そうして日本という「サークル」から自由になった度合いに応じて、読者は「階級制度」に立ち向かう「平等思想」を学ぶであろう。或いはまた、自己の「欲楽」を手放すことを良しとする日本の慣習（「わきまえた女」になること）に囚われて「空疎」に陥ってしまう、といった事態を避けるための、色々な工夫や思想・信条等を学ぶこともできよう。——そう、語り手は示唆しているように思われる。

『道を尋ねて』

ここでは、数学を得意とする「根自在主童子」から、「弁具足といふ貴女」が南方にある「海別住」という城にいるから、「南へ行け」と善財童子は命じられる。

見るに弁具足道女は、若い美しい気高い人で、華やかな飾などは一切身につけず、涼しげな清らかな服を着けて、髪をも自然に任せて垂れて居りましたが、おのづからなる風丰の勝れたありさまは、人をして敬重し且つ愛慕せしむるに足るも

のがありました。

彼女の前には、「ただ一つの小さな器」が置かれている。善財童子に向かつて、弁具足はいう。

我は菩薩の無尽の福德莊嚴解脱門を得て、能く是の如き一つの小さな器の中より諸の衆生の欲するところに随つて、そのために種々の甘美上好の飲食を出し、その色あひ、香氣、味、さはり、悉く皆満ち足はしむるのであると申しました。

そして、驚くべき数の人々に、怨親貴賤貧富の別なく求めるものを、この小さな器から出して与えるが、「しかも我が此の器の中の減るといふこと無く、まして尽くることなし」、という話。これに対する語り手のまとめは、以下の通りである。

瞿曇が断食苦行の晩に、ほとんど死せんとした時、牛酪を供養して道を成すに至らしめた一少女もやはり弁具足道女の一类でありませう。又今日さまざまの愚なることや迷へる心より悲しい罪を犯して鉄窓に呻吟いたして居るものに慰謝の差人物などを致す人も、やはり弁具足道女の同行者で無いとは申されませぬ。そして其の小さな器は、なるほど小さな器でせうが、無尽福德蔵でありませう。

人間の善性、「ただ一つの小さな器」のようにはかなげではあるが、決して尽きることのない、その豊かさを称えて、露伴の「華厳経三部作」は閉じられる。

注

- (1) のち拙著『幸田露伴論』（翰林書房刊。平18・3）に第十章として所収。
- (2) 「齊家の両極」には、「寛大」と「緻密」のすすめの主張に付随して、西欧ではパンを焼いたり、洗濯や裁縫などが外部の専門業者に委託される度合いが高いが、日本ではそれがすすんでいないので、家事負担が過重である、という指摘がある。少年文学「供食会社」（明45・1）に共通する問題意識である。
- (3) 『日本近代文学大事典 第五巻』（昭52・11）の当該項目（担当・小久保実）に拠る。
- (4) のち注(1)の拙著に第十四章として所収。
- 〈せきやひろし／本学教授〉

第一〇四号 目次

二〇二一年六月

京都大学人文科学研究所蔵『天地瑞祥志』	
第十二翻刻・校注(二) — 「正月朔旦候風」「五音風」 —	水口幹記
.....	関谷博
学人露伴(三) — 仏教・その二 —
キリシタン資料における「あい(愛)」について	漆崎正人
.....
オノマトベ試論 — 慣習と創造の狭間で —	揚妻祐樹
三遊亭円朝速記本における尊敬語について
— 明治新語使用の意味とは? —	青木杏佳
二〇二〇年度 日本語・日本文学科 卒業研究題目一覧

一冊 五〇〇円